

令和4年度 第61回米子市美術展覧会（市展）  
部門別審査講評 及び 市展賞作品講評

**【洋画】**

審査講評：

コロナ禍の事も有るのか作品数が減少した。その中でも若い人の意欲的な作品や年配の人の思いのこもった作品には、審査をする側にも刺激を頂いた。

（評者：光木 桂二）

市展賞：提島 和則《生老病死》

植林された木々を幾何学的な形で大胆に構成されている。空の金粉の中の稲妻、画面の右側の空、山のグラデーションの中に雨。林の中のジグザグの中に人。緑の木々の中に枯れ木のアクセント。チャレンジ精神旺盛な、よく考えられた作品である。

（評者：光木 桂二）

市展賞：高石 恵美《永江山草会》

植木鉢の中で8人の年配の男女が作業をする人、お茶を飲みくつろぐ姿が楽しく描かれている。水彩画の特性がよく生かされている。たくさんの人物もよく描かれていた。発想もユニークな、ほのぼのとした作品である。

（評者：光木 桂二）

**【日本画】**

審査講評：

作品の出品数は年々少なくなっているが、人物、風景、身の廻りの物など、個性的・独創的な変化に富み、新しい風を感じられる作品が多い。

近年になく見ごたえのある日本画部門です。

（評者：松岡 託司、野口 昭子、横畑 昌子）

## 【書道】

審査講評：

新型コロナの影響のためか、出品数が前回よりも9点減となり残念でした。しかし、作品の出来は、新しい表現スタイルのものが多くだされて会場展示効果の点でよかったですと思います。作品制作は、常に新しいものをめざし、しかも古典のにおいのする品格の高いものでありたいと、これからの出品の方々に望みます。

(評者：船原 濤軒)

市展賞：阿部 恵勝《良寛・春の歌》

良寛の歌を良寛の書風で表現した佳作で、清々しさを感じさせる行のひびき合いがあり、これからの作品の格調が高まることを期待します。

(評者：船原 濤軒)

市展賞：伊藤 晃希《梅花の歌》

墨量の変化、線の太細に配慮し、一気に書き上げられた作品である。快いリズム感、躍動感が素晴らしい。

(評者：藤山 雅鳳)

市展賞：西山 遥月《万葉集抄》

平安時代の古筆関戸本古今集を土台として創作された作品。

古筆の味わいを活かし、ゆっくりとした動きを素直な線で表現されており、好感がもてる。

(評者：中澤 秀月)

## 【写真】

審査講評：

近年諸般の事情から全体的に応募数の減少が見受けられるが、写真部門においても例外でなく、かなりの減少で今後の対策が必要と思われます。作品内容においてもその影響は大である。市展賞2点とも結果的に組写真が入ったが、モノクロとカラーであったのは幸いであった。

(評者：福島 多暉夫)

市展賞：加川 清三郎《海岸通り》

山陰海岸の風情を三枚組で明るいタッチで作者のねらい通りうまく表現されている。カラープリント技術、色も大変良い。

(評者：福島 多暉夫)

市展賞：大田 和夫《散歩道》

作者の愛犬だろうか、日常の犬の散歩風景が手にとるようだ。特に一番下の一枚は主人とワンちゃんの影で如実に表現され良い作品だ。

(評者：福島 多暉夫)

### 【工芸】

審査講評：

ものを造るという作業をする方が少なくなっているのか、それを楽しむ時間が無く無関心なのか、年々出品数、出品者共に少なくて残念に思います。

例年出品しているお馴染の方の作品は、見ごたえがあり好感が持てます。

(評者：安藤 釉三)

市展賞：岡田 友良《春暁》

一枚の板を透かし彫りにし、たわむれる小鳥の表情がとても愛らしく技術もしっかりしている。

(評者：安藤 釉三)

市展賞：武良 理絵子《はまゆう》

灯して視た時の配色も良く、心の一隅を照らすようなほのぼのとした作品です。

(評者：安藤 釉三)

### 【彫刻】

審査講評：

彫刻部門は出品数が少なく、残念な面がありました。しかし、ユニークな作品もあり、将来的に期待されます。全体的に工芸的作品が多く、次回出品の際は、一考する必要があると感じました。審査は、厳正・公平に行いました。

(評者：宗内 彰志)

市展賞：野坂 文枝《Cosmo's》

審査の中で、ガラスと鉄の造形の集合体ということで討議を重ねました。結果、現代美術的表現として市展賞を受賞されました。今後の作風の変化に期待したいと思います。

(評者：宗内 彰志)